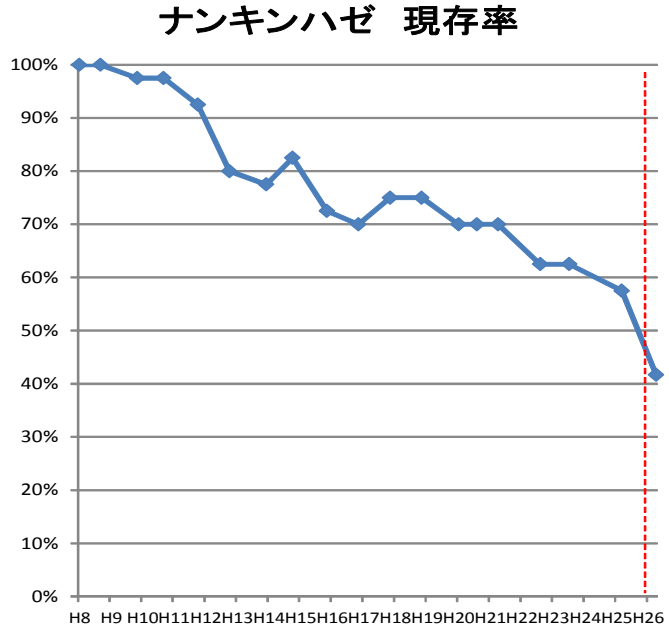
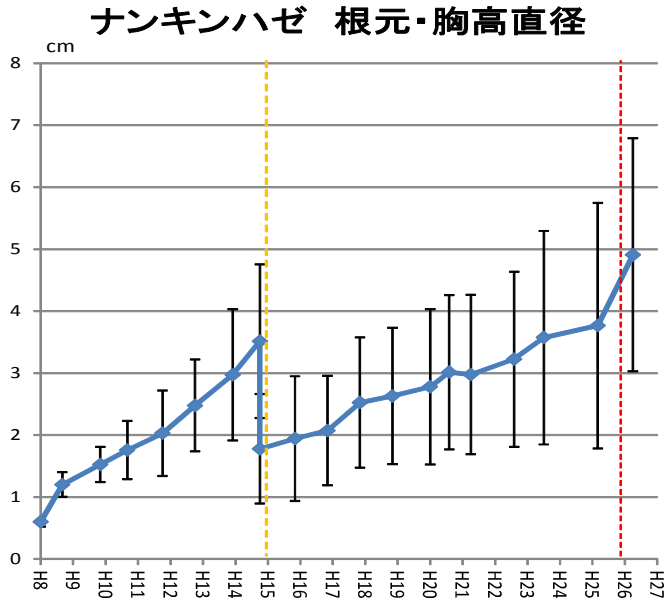
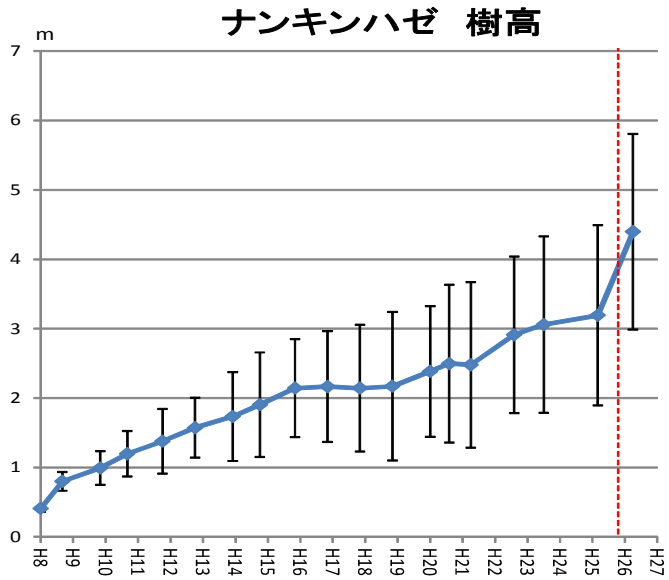
樹種名	ナンキンハゼ
科　目	トウダイグサ科
学　名	*Sapium　sebiferum*
分　布	中国原産で九州では一部野生化している。適潤肥沃地を好むが耐湿性が強く、低湿地・川辺でもよく育つ。
樹木特性	公園などによく植えられており、秋になると葉が黄色から紅色に色づいてとても美しい。この葉は染料となる。
用　途	公園樹、街路樹、器具材として利用。
植栽本数/面積 （植栽密度）	300 本／ 0.09ha （約 3,500 本／ ha）
特　徴	【樹　形】 ナンキンハゼ（南京櫨）は、トウダイグサ科の落葉高木である。樹高 6m 程度。葉は三角状広卵形で先端は尾状で、秋、紅葉する。花は雌雄同株であり、5 月から 6 月開花する。雄花は総状花序で、その葉腋に雌花をつける。 果実は秋、少し三角のかかった球形の蒴果（さくか）を黒熟させ、3 個の種子を出す。種皮は黒色であるが、その表面は脂肪に富んだ白色の蝋状物質で覆われる。蒴果が裂開しても、種子は果皮から自然に離脱することはなく、紅葉期から落葉後まで長く樹上に留まり、白い星を散らしたようで非常に目立つ。ムクドリなどの鳥類がこの種子を摂食し、蝋状物質を消化吸収して種子を排泄することで、種子分散が起こる。ハゼの名称はついているが本種はトウダイグサ科でありウルシ科の樹木と違って皮膚がかぶれることはない。 秋の紅葉が美しく緑化樹として利用されている。白蝋をかぶった種子から蝋油を搾油できるが戦後になって途絶えている。材は家具・器具に利用される。
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。現存率は 42 %程度となっている。植栽から 18 年が経過した現在の平均樹高は 4m 程度と低い。
被　害	植栽後からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。特にコウモリガの被害が顕著であった。（延べ駆除本数　コウモリガ：116 本、カミキリムシ類：12 本）



【現存率】
植栽後よりコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 41.7%であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



【根元・胸高直径】
現存木は順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 4.91 ㎝であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※　オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。



【樹　高】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 4.40m であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。